

ようなムードなので若い研究者も積極的に発表を行なえると思われる。この日の最初の発表は東京理科大学の日下氏によるもので、従来所与とされていた設備規模を信頼性・保全性を考慮しながら決定するという問題を非線形計画法を用いて論じられた。信頼性会場の中心テーマは、さまざまな条件下におけるシステムの信頼性解析と最適保全方式に関するものであった。複雑なモデルをとりあつかう場合は、システムの信頼性の尺度としてどのような評価尺度を用いるかが問題となる。このような問題に関する広島大の中村氏らの発表はたいへん興味深かった。保全方式に関する発表では minimal repair を考慮に入れたモデルが多かったのも1つの特徴であろう。このような問題では、考えているモデルの妥当性・現実性が問われるわけで、専門外の者にもわかるような具体的な例をあげて説明してほしいという感じをもった。実際に、モデルの意味に関する質問もいくつかなされていた。また自分として印象の深かったのは大阪大の大鏑氏らによる多状態コヒーレントシステムに関する発表であった。この発表は第4報であり、これまでは多状態コヒーレントシステムの寿命分布に関するいくつかの closure theorem について述べてこられたが、今回はそのような理論の展開で有効な道具となる hazard transform について論じられた。最後になったが、15:20~16:00 のペーパー・フェアでは各研究部会の部会報告を中心に活発な議論が交されたことをつけ加えたい。

(宮川雅巳)

## いま一步の感あり

初日の午後の特別講演会も盛況であった。発表者は某

**編集後記** 本号特集は研究部会「創造性開発の数学モデルとCBD」による企画です。創造することはだれにとっても夢であり、生きがいであるものの創造することがいかに大変なことか身をもって感じています。本号の特集「創造への接近」によってもそのアプローチがなごい層大変なものだと感じられましたがいかがでしょうか。

大手スーパーの物流部長で、業界の実情、永年の体験談等わかりやすい話を聞くことができた。

そのあとは一般発表とペーパー・フェアが続き、各人興味のある会場をわたりあるいたのであるが、個人的な感想を言わせてもらえば必ずしも理解しやすい発表ばかりではなかった。これはもちろん聞く側の知識不足が最大の理由であり、日頃の不勉強をたなに上げて、やれわかりやすさだの応用性だのと発表分野によってはないものねだりにすぎないのであろうが、出張旅費をもらって聞きにくる身にとつてうしろめたさを感じなくても済む程度にわかせてくれる(あるいはわかった気にさせてくれる)発表がもっと多くほしかった。

難解な発表を聞きつつ考えてみたが、聞く側にとって魅力ある研究発表会の条件としては、①発表のテクニック(棒よみではダメ)、②時間割の組み方(「数理計画」、「信頼性」といった従来のわけ方だけでなく「理論学向き」、「応用一点張り」のような基準を導入する)、③座長の態度(質問が出ないときは皆のわかってなさそうなところを自分から聞いてやる)などが重要であろう。この日たまたま聞いた範囲では、座長の態度だけがまずまずで、それ以外の面はいま一步という感じがした。

(全田寛)

**お詫び** 春季研究発表会は多数参加者を数え盛大に催され、会員各位にお礼申し上げます。なお、見学会申込者多数のところ申込み先着順に定員で勝手ながら打ち切らせていただきました。ここにお礼かたがた、お詫び申し上げます。(春季研究発表会実行委員会)

▶さて、5月で当OR誌編集委員会の高橋体制がスタートしてちょうど2年経つこととなります。5月15日の総会を待って次期の小林竜一先生を委員長とする体制にバトンタッチできることとなり、スペースシャトルのようなパーフェクト・タッチ・ダウンを目ざして引き継ぎの準備に入っているところです。(M)

# オペレーションズ・リサーチ

昭和56年5月号 第26巻(新シリーズ第6巻) 5号 通巻245号

代表者 松田武彦

発行所 社団法人 日本オペレーションズ・リサーチ学会  
東京都文京区弥生2-4-16 学会センタービル  
(電話 03-815-3351~2) ☎ 113

編集人 高橋 磐 郎

発売所 株式会社 日科技連出版社

東京都渋谷区千駄ヶ谷5-4-2 ☎ 151

本誌のご注文は直接

日本オペレーションズ・リサーチ学会へ

定価 850円(郵送料含)年間予約購読料 8800円(郵送料含)

本誌への広告お申し込みは明報社(571-2548)、日経弘報社(563-2241)へ